

福岡市

# 小 笹 遺 跡

## 第2次発掘調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第34集



1975

福岡市教育委員会

## 序

本書は、昭和47年度に日本住宅公団福岡支社との委託契約にもとづく、西区小篠地内の住宅団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に関連した報告書であります。

調査に当りましては、日本住宅公団関係者の方々をはじめ関係諸方面の多大なご協力を得ましたことに謝意を表するものです。

本書に収録された資料が永く保存され、文化財保護思想の育成に活用されますとともに、学術・研究の分野においても役立つことを願うものであります。併せて年々失われてゆく埋蔵文化財についてなお一層のご理解とご協力を願ってやみません。

昭和50年3月

福岡市教育委員会

教育長 古 村 澄

## 凡　　例

1. 本書は、日本住宅公団箇の台団地造成により破壊されるため事前に調査した小並遺跡の第2次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、日本住宅公団の委託をうけて1973年（昭和48年）8月13日から10月23日にかけて、福岡市教育委員会が実施した。
3. 遺跡名は、第1次発掘調査当初のものを踏襲した。
4. 発掘調査は、福岡市教育委員会文化課の飛高憲雄、福田征一（事務担当）、二宮忠司が担当した。
5. 本書の執筆・編集は、飛高憲雄、二宮忠司が担当した。
6. 本書の執筆・編集には、柳田純考、塩原勝利、折尾学、山崎純男、柳沢一男、力武卓治らの協力を得た。

## 目 次

### I はじめに

(1) 第2次発掘調査にいたる経過	4
(2) 遺跡の位置と立地	5
(3) 発掘調査の経過	8

### II 遺 構

### III 遺 物

(1) 外生式土器	16
(2) 石器・鉄器・玉類	27

### IV おわりに

## 挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡遠景（仙山より撮影）	6
Fig. 2 小塙遺跡位置図（縮尺 $\frac{1}{2500}$ ）	6
Fig. 3 小塙遺跡立地地点図（縮尺 $\frac{1}{2500}$ ）	7
Fig. 4 遺跡近景（丘陵上より撮影）	7
Fig. 5 遺跡全景	8
Fig. 6 地形測量図（縮尺 $\frac{1}{2500}$ ）	9
Fig. 7 遺跡の地層状況	10
Fig. 8 発掘調査状況	12
Fig. 9 遺構と遺物の出土状況	14
Fig. 10 遺構測量図（縮尺 $\frac{1}{250}$ ）	15
Fig. 11 遺物出土状況	19
Fig. 12 土器実測図( I )（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	20
Fig. 13 土器実測図( II )（縮尺 $\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{2}$ ）	21
Fig. 14 土器実測図( III )（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	22
Fig. 15 土器実測図( IV )（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	23
Fig. 16 土器実測図( V )（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	24
Fig. 17 土器実測図( VI )（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	25
Fig. 18 土器( I )	25
Fig. 19 土器( II )	26
Fig. 20 石器・鉄器・土類実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	28
Fig. 21 石器・鉄器・玉類	28
Fig. 22 石器・石製品実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	29

# I はじめに

## (1) 第2次発掘調査にいたる経過

日本住宅公団の小笠の台開地造成地に予定されたところには、標高30~40mの舌状丘陵が南に向かって何本か伸びており、予備調査の結果、C区3-b地点において石蓋土塚が確認され、同地点の尾根の先端部には黒色土の堆積が認められた。

第1次発掘調査は、予備調査で確認された上記の遺構の検出に主力が注がれた。その結果、6基の石蓋土塚を中心とした弥生時代の遺跡が明らかにされた。

C区3-b地点から南側へ緩傾斜面が更に20~30mほど続いており、この部分にも遺構の存在が予想されたが造成地の範囲外であることから調査の対象からははずされていた。

ところが、第1次発掘調査の報告書作成後、発掘調査担当者であった福岡市教育委員会文化課の柳田純孝、柳沢一男が現地を訪れた際、既にその部分も造成中であった。そして、その1箇所から土器が検出された。その時の様子は、次のようにあった。「C区3-b地点の調査の結果を報告したが、報文作成後、たまたま現地を訪れた際（昭和48年3月14日）3-b地点の南側へのびる丘陵の先端部を造成中であったが、その1箇所に土器が検出された。Pit状遺構から南西へ約30mの地点でこれを3-c地点と呼ぶ。西側斜面に土器の散布が認められたP7地点の延長上にあり、丘陵尾根から西側へ傾斜する端縁部にある。黒色土中に弥生土器片が認められ、20×40cm大の花崗岩2個が火を受けて赤変しており、炭化物も認められた。3月17日~24日迄3-c地点の遺構の範囲を確認することに努めた結果、黒色土は狭い範囲に限られるが、黒色土中には壺、甕、器台片が多くあり、完形に近いものが数個分含まれ、報告した際の祭祀遺構と同様な遺構と考えられる。土器は報文中の祭祀遺構より一時期下るもので後期中葉と考えられる。従って公団の造成地より南へも遺構、遺物の広がりが認められたわけである。本報告文とは時期差が認められることから、この時期の墓地群の広がりを想定しなければならないであろう。しかし、3-c地点を除いてはすでに削平されており、墓地群との関連を求めることができないことは誠に遺憾とする外はない。3-c地点については短期間で調査を完了する状態でなくなつたため、遺構・遺物は一旦埋めもどし、本調査を待つことにした。従って3-c地点の報告は本文中に含めることはできなかったので、本調査の段階で3-b地点との関連性を追求することにしたい」（小笠遺跡発掘調査報告書中の追記より）

以上のような経過から住宅公団もC区3-c地点の本調査の必要性を認め、福岡市教育委員会に再度小笠遺跡の発掘調査を要請してきた。

## (2) 遺跡の位置と立地

福岡平野の西、東油山から北にのひた鴻の巣山を中心とした平尾丘陵の西側に、ゆるやかな傾斜をもった小盆地が位置する。この台地は、いくつかの舌状丘陵を持つ。台地上の平坦面から南側にゆるやかに傾斜する部分に、第1次発掘調査を行なった3-a、3-b地点がある。第2次発掘調査地点は、3-b地点よりさらに南側へくだった尾根の先端部の、やや平坦な部分に位置し、標高約25mである。この地点は、第1次発掘調査終了後に発見された遺跡で、この地点は3-c地点と名付けられた。この3-c地点は、西側にやや傾斜している。また、この地点の南側・東側は、急な傾斜をもっており、比高12m程度である。また西側は、ややゆるやかな傾斜をもっており、次の舌状丘陵との谷へ落ちる。第1次発掘調査地点の3-b地点と第2次発掘調査地点3-c地点の比高は約10mをもち、直線にすれば、20~30mの距離である。また、この丘陵の土層は、古第三紀層中の福岡層群～野間層の上層部に位置する砂岩・頁岩・礫岩層の風化残積粘性土層であることは、福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集小盆地跡第1次調査の土層の記載と同様で、第三紀層の互層の特徴である浸透性の強い点、風化の度合がひどい等のため、弥生土器片も表裏がボロボロの状態であり、遺物のとり上げ、復原は難航した。周辺遺跡等に関しては、第1次の報告書とはほとんど変化がなく、新らしい遺跡の発見・確認等も現状ではなされていない。なお、周辺遺跡について第1次の報告と重複するが、ここで簡単にふれておきたい。

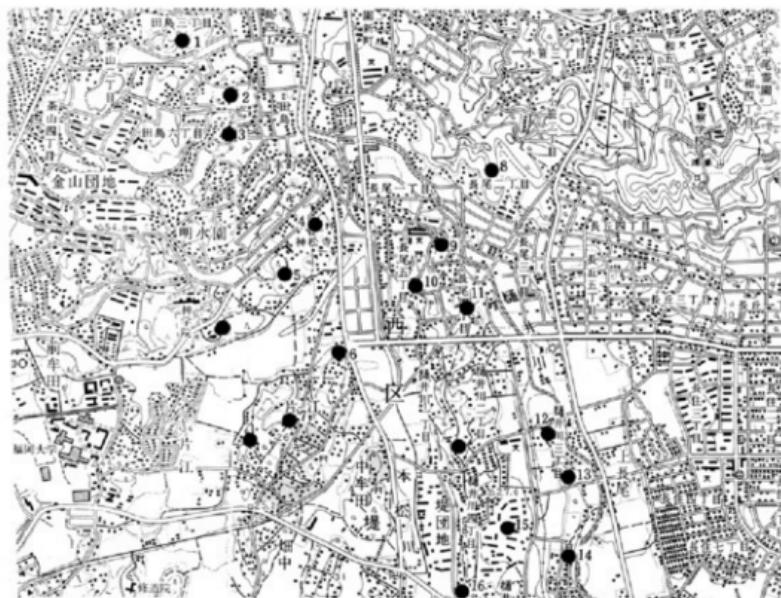
東油山に源を発する樋井川が、鴻の巣山の西側先端部を北流する間に、いくつかの低丘陵が東油山・鴻の巣山からのびており、標高20~30mを持つこれらの低丘陵には、弥生時代の遺跡が存在している。

樋井川の西側、七隈から飯倉にかけて浄泉寺・神松寺・友泉山手・田島遺跡等の弥生前期末から中期の包含地が、また片江川と一本松川にはさまれた丘陵には、北片江・片江斐浜遺跡が分布し、下長尾丘陵には、下長尾天神・浦山・本村・宝台・丸尾台遺跡等の弥生時代遺跡が分布している。

また田島京ノ隈・下長尾八六宮・上長尾御子神社遺跡等のように箱式石棺墓を主体とする遺跡の分布もみられる。このように、同じ低丘陵上に遺跡の分布がみられる点と、同時期の遺跡の分布状態からみて、当遺跡と周辺遺跡との関連を把握し、再度この低丘陵の持つ意味、ならびに低丘陵の遺跡の分布等について検討される必要があろう。



Fig. 1 遠景（矢印の交点が遺跡。油山より撮影）



- |           |            |           |            |
|-----------|------------|-----------|------------|
| 1. 京ノ眼遺跡  | 5. 浄泉寺遺跡   | 9. 天神遺跡   | 13. 上長尾遺跡  |
| 2. 田島遺跡   | 6. 北片江遺跡   | 10. 本村遺跡  | 14. 御子神社遺跡 |
| 3. 友泉山手遺跡 | 7. 北片江甕棺遺跡 | 11. 津浦遺跡  | 15. 宝台遺跡   |
| 4. 神松寺遺跡  | 8. 小菅遺跡    | 12. 八六宮遺跡 | 16. 丸尾台遺跡  |

Fig. 2 小笠遺跡位置図 (縮尺25566)



Fig. 3 小庭遺跡立地地点図 (縮尺  $1/2500$ )

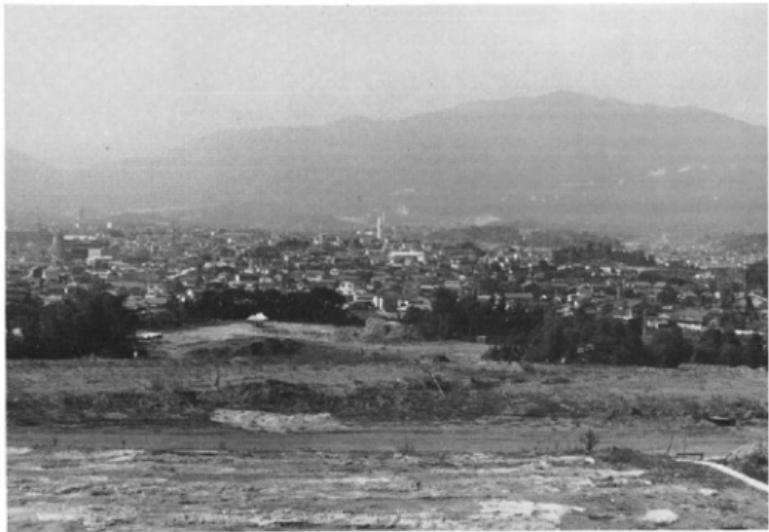


Fig. 4 遺跡近景 (丘陵上より撮影)

### (3) 発掘調査の経過

今回の調査は、すでに発掘調査にいたる経過でのべたように、当初、小篠田地造成予定地にはいっていなかったC区3-c地点で、1973年3月に土器の散布が確認されたため、急きょ行なわれることとなったものである。狭い範囲に黒色土が認められ、この黒色土中に土器が包含されていることが分かったため第1次発掘調査で明らかにされた祭祀遺構と同様の遺構の存在が予想された。発掘調査は、すでに同年3月に設定したトレッチなどで、遺構のおおよその広がりが確認されていたので、まず発掘調査対象地全域の表土を除去することから開始して遺構の広がりをとらえようと考えた。また、この遺構が第1次発掘調査によってC区3-b地点で確認された石蓋土塙墓などを中心とする墓地と、どのような関連があるのか、あるいはないのかを探ることが、まず1つの目的であった。今回の発掘調査対象地は、丘陵の西斜面のかろうじて削平をまねがれたごく一部分であり、墓地の存在は考えられない地形にあるということは、すでに前述したとおりである。そのため、今回の発掘調査地点で明らかにされる遺構と、第1次発掘調査のC区3-b地点の石蓋土塙墓などとの関連が認められない場合には、すでに削平されてしまったC区3-c地点の近くに、重要な遺構があったのではないかということになり、非常に残念なことになる。この点についても、すでに発掘調査にいたる経過でふれたとおりである。小篠遺跡の第2次発掘調査は、1973年(昭和48年)8月13日に開始された。



Fig. 5 遺跡全景

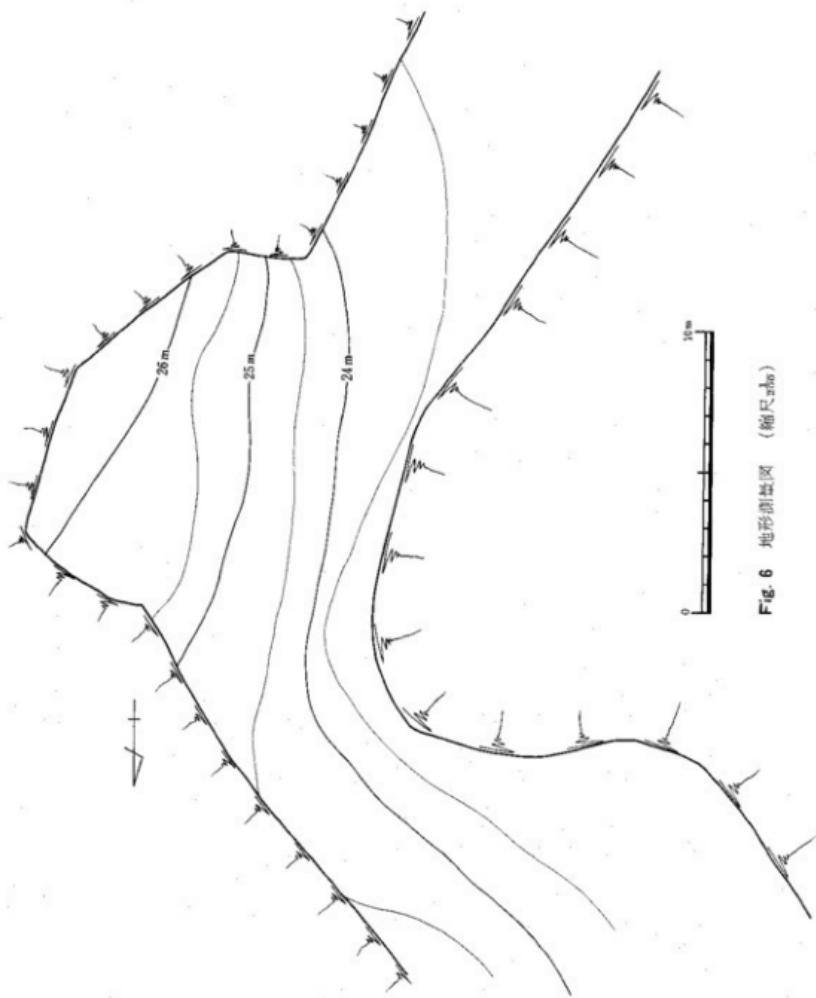


Fig. 6 地形剖面図 (縮尺100m)

C区3-c 地点を完全発掘調査することに主眼をおいて、8月17日、発掘調査対象地域全体の表土除去を開始した。すでに、トレンチが遺構の中心と思われる部分に設定されており、また壺形土器、甕形土器、器台形土器などの幾つかは、3月の予備調査の折に確認されているため、これらを目安にして発掘調査を進めた。8月22日、地山の風化土を切り込んだ、土壇状の遺構の存在を確認することができた。それは、25.5mの等高線にそって北から南へ走っていた。しかし、この掘り込みの西側の線は、表土を除去した段階では確認できなかった。丘陵の上方では、はっきりしている掘り方が、下方では、丘陵の傾斜にそって流れている状態であった。この西側の掘り方は、発掘調査の最後まで明確に把握することができず、困難をきたした。東側の掘り方からみて、地形にそって方形になるのではないかとの予想のもとに、内部の土器の検出に力を入れた。ところが、当遺跡の立地する丘陵の表層が、頁岩の風化した粘性土であるため、浸透性が強く、土器がその影響をうけて非常にもらくなってしまっており、発掘調査はたいへん難航した。そのために、土器の急げきな乾燥をさけながら発掘調査を進めた。しかしながら、多くの土器は、取り上げに際して細片化してしまい、これはまた復原作業にも大きく影響した。

発掘調査が進展するにしたがって、土壇状の遺構の内部には相当量の土器が集積されているらしいことがわかつってきた。そのため、当初予定していた調査期間だけでは、とうてい終了できないことが明確となり、9月18日より、多くの人たちの応援をたのむこととなった。



Fig. 7 遺跡の地層状況

調査が進むにしたがって、壺形土器の、袋状口縁を特徴とするものの中にも、外側に稜を有するものと、二重口縁的なものがあるということがわかつてきた。しかも、その集積の具合からみて、セットとしてとらえることができる考え方、上層から5回に分けて、土器を取り上げることとし、9月30日、1m四方のグリッドを組んで、土器の取り上げを始めた。しかし、報告に際しては、区分せずに一括してあつかった。

初めに確認された遺構をA溝とした。

発掘調査を進めながら、さらに南側を精査したところ、10月8日になって、さらにもう1つの、A溝より幅の狭い溝状遺構が確認された。これをB溝とした。B溝では、△溝のような、土器の集積状態はみられず、むしろ、整然と置かれた状態であった。また、それと同時に、上方より転落したと考えられるものもあった。10月28日、A溝の南東部に焼土や灰の多く残る部分がみつかった。10月19日には最終的に遺物のとりあげを行ない、完了したが、出土遺物は、人型埴籠箱28箱分にも達した。土器の多くは完形品で、充分な日数をかければ、なんとか破砕させずに取りあげることも可能であったと思われるが、事情が許さず、かなりあわただしく、不完全な調査に終ったことは、非常に残念であった。遺物のとりあげが終って、10月22日には遺構の実測を行なった。10月23日、油山中腹より遺跡の写真撮影を行ない、小椎遺跡等2次発掘調査を終了した。

この発掘調査にあたって、多くの方々のご協力を得ました。ここにその方々を記して、感謝の意を表します。（以下敬称略）

安部国恵 安部サエ子 安部ツチエ 安部道子 都地富美子 光安貞子

光安富美子 光安礼子 小森真造 和田むづみ

後沼組

また発掘調査資料の整理にあたっては、下記の方々のお世話になりました。ここにその方々の名前を記して、お礼申し上げます。

今村淳子 内海サト 八藤丸一枝 山口栄 山崎チヨ子



Fig. 8 発掘調査状況

## II 遺 構

すでに第2次発掘調査にいたる経過でも述べたように、当初、C区3-c地点では、C区3-b地点で明らかにされたような祭祀遺構の存在が予想されたのであるが、発掘調査の結果、A・B2本の溝状の遺構が確認された。

### A溝(Fig.10)

A溝は、北から南へ走り、その南端から西、すなわち斜面に向かってL字形にのびている。溝の長さは、南北が6m、東西3.5mで、幅は狭いところで1.5m、広いところでは2mを計る。深さは、斜面上方で80cm、下方では50cmである。また、溝は、ほぼ垂直に切り込まれている。溝の底は、南から北へ向かって次第に高くなっている。その北端では、なだらかに上がっている。L字形の溝の東西に走る部分の両半分は、約10cmほど高くなっている。

A溝からは、弥生式土器（壺形土器、甕形土器、高杯形土器、器台形土器、鉢形土器）、石器（石臼、石錘、など）、鐵器（刀子）、ガラス小玉などが出土した。

土器をはじめとする各種の遺物は、この溝状の遺構の溝底から、溝の上面まで、溝を埋めつくすような状態で置かれていた。その配列には、特に規則性は認められなかった。大型の壺形土器や甕形土器が非常に多く、土器の大半を占め、しかも、かなりの数が完形品であったが、保存状態が悪く、取り上げ不可能な物が多かった。壺形土器や甕形土器の数に対して、高杯形土器の数が特に少なかったということは、この溝の性格を考える上で充分考慮すべきことであろう。

### B溝(Fig.10)

B溝は、南北に走る溝で、A溝の南1.2mの所から南へまっすぐに4mが確認された。さらに南へのびていたものと考えられるが、すでに、その部分は破壊されてしまっていた。幅は、上面で1m、溝底で50cmを計る。溝の断面は、浅いU字形をなしている。

B溝からは、弥生式土器（壺形土器、甕形土器、高杯形土器、器台形土器、鉢形土器）が出土した。これらの土器は、ほぼ完形品で、溝に置かれたらしい物と、溝上から転落したものと思われるものとがあった。これらは、いずれも保存状態が非常に悪く、取り上げ不可能なものが多くいた。

A・B両溝とともに、現在の標高25mのラインにそって掘られている。

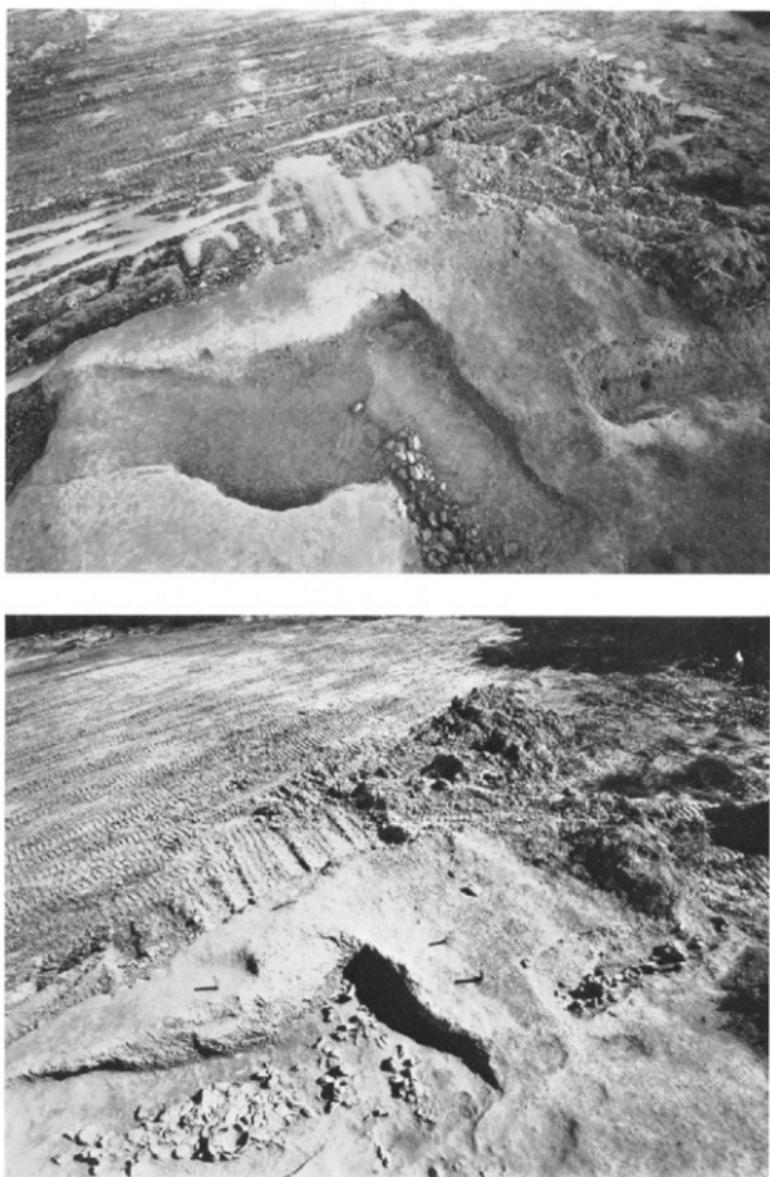


Fig. 9 遺構と遺物の出土状況

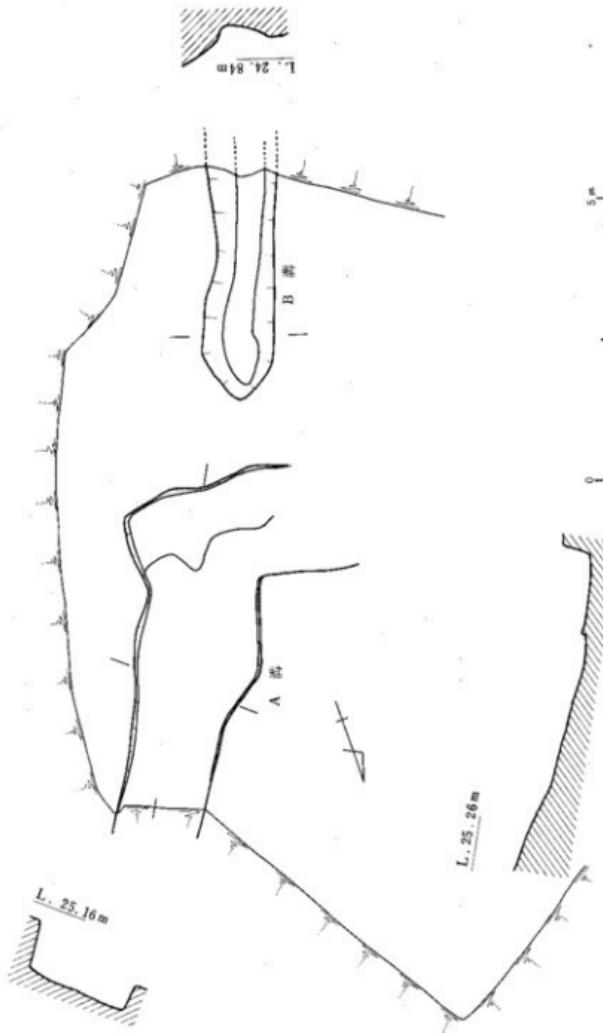


Fig. 10 洪佛測量圖 (縮尺1:100)

### III 遺 物

#### (1) 弥生式土器

弥生式土器は、器体の保存状態が非常に悪く、ほとんど復原できなかった。そのため、図示したものはほとんどは破片である。

##### 壺形土器(Fig.12, Fig.13)

壺形土器には、ゆるやかに外反する口縁をもつものと、袋状口縁を有するものがある。袋状口縁には、内方に彎曲したものと、外側に稜をもつものがある。図示したものは、すべてA溝出土のものである。

Fig.12の1～4は、いわゆる袋状口縁を有する壺形土器の口縁部の破片である。いずれも保存状態が悪く、器面の調整手法は不明である。Fig.12の1・2は、胴部と頸部との境に断面三角形の凸帯が認められる。Fig.12の1は口径17.5cm、焼成は良好で黄褐色を呈する。Fig.12の2は口径20.5cm、焼成良好で灰褐色を呈する。Fig.12の3は口径20.2cm、焼成は良好で黄褐色を呈する。Fig.12の5は口径20.2cmで灰褐色を呈する。Fig.12の4は口径14.7cmで灰褐色を呈し、内面の口縁下部には2条の沈線があり、その下には刷毛目が残っている。Fig.12の6は口径19.5cm、焼成は良好で赤褐色を呈する。彎曲する口縁の内側には、明瞭な棱線をもち、外面には刷毛目が残されている。

Fig.12の7～12、Fig.13の1～4は、袋状口縁の外側に稜を有する壺形土器の口縁部の破片である。Fig.12の7は口径20.8cm、焼成は良好で灰褐色を呈する。胴部と頸部との境に断面三角形の凸帯を有し、外面に刷毛目が残されている。Fig.12の8は口径10cm、焼成良好で赤褐色を呈する。内・外面ともに刷毛目が残っている。Fig.12の9は口径21.3cm、焼成は良く、赤褐色である。内・外面ともに刷毛目が残されている。Fig.12の10は口径16cm、焼成は良好で赤褐色を呈する。Fig.12の11は口径18.7cm、焼成良好で灰褐色、内面は黒褐色を呈している。胴部と頸部の境に凸帯が付くものと思われる。Fig.12の12は口径13.8cm、焼成は良く、黄褐色である。胴部と頸部の境には凸筋が付くものと思われる。Fig.13の1は口径16.5cm、焼成良好で灰褐色を呈する。口縁部外側には鋭い棱を有する。Fig.13の2は口径18cm、焼成良好で赤褐色を呈する。屈折する口縁部外側には凸帯状の張り出しが見られる。Fig.13の3は口径20.5cm、焼成は良好で灰褐色を呈する。2と同様、口縁部外側には凸帯状の張り出しが見られる。Fig.13の4は口径13.8cm、焼成良好で灰褐色を呈する。頸部と胴部との境に1条、腹部に2条の断面三角形の凸帯をめぐらしている。Fig.13の5は壺形土器の完形品である。器高49.8cm、口径は24.4cm、胴部最大径33.2cmであり、黄灰褐色を呈する。頭部と胴部との境に断面三角形の、また腹部には断面台形の凸帯を各1条めぐらしている。口縁部は短かく、ゆるやかに外反している。Fig.13の1～5ともに器体の保存状態が非常に悪く、器面内外の調整手法は不明である。

Fig.13の6は壺形土器の完形品で、器高59.4cm、口径19.5cm、胴部最大径41cmである。焼成は良好で赤褐色を呈する。胴部と頸部との境に断面三角形の、また腹部に断面台形の凸帯をそれぞれ1条めぐらしており、内・外面ともに刷毛目が残されている。

#### 壺形土器(Fig.14、Fig.15-1～3)

壺形土器は、すべてA溝出土のものである。

Fig.14の1は口径23cm、焼成は良好で淡褐色を呈する。口縁部は「く」の字形である。Fig.14の2は口径26.8cm、焼成良好で黄褐色である。「く」の字形口縁である。Fig.14の3は口径29cm、焼成は良好で淡茶褐色を呈する。口縁部は大きく外反している。Fig.14の4は口径21.8cm、焼成良好で淡灰色を呈する。外面に刷毛目を残している。口縁端には面取りがなされている。Fig.14の5は口径25.6cm、焼成は良好で褐色である。胴部外面には刷毛目が残されている。口縁は「く」の字形を呈し、口縁端には面取りがなされている。Fig.14の6は口径23cm、焼成良好で灰褐色を呈する。胴部内面には刷毛目が残されている。口縁端は面取りがなされ、上面が水平に近くなっている。Fig.14の7は口径29cm、焼成良好で赤褐色を呈する。口縁部直下に断面三角形の凸帯をもち、口縁部は「く」の字状で口縁端は面取りされている。Fig.14の8は口径22.6cm、焼成は良好で黒褐色を呈する。口縁部はまるく外反する。口縁端は面取りされている。Fig.14の9は口径28.2cm、焼成は良く黄褐色である。口縁部直下に断面二角形の凸帯をめぐらす。口縁部は「く」の字形で、口縁端はまるい。他にくらべて器肉がいちじるしく厚い。Fig.14の10は口径22.7cm、焼成は良く褐色を呈する。口縁部はまるく外反して「く」の字状を呈し、口縁端は小さく肥厚する。Fig.14の11は口径33.5cm、焼成は良く灰黒色である。「く」の字状口縁で、口縁直下には断面三角形の凸帯をめぐらす。口縁端はなでて仕上げている。Fig.14の12は口径16.5cm、焼成は良く暗茶褐色である。内面に刷毛目が残っている。胴はあまり張らず、口縁端はなでて仕上げている。Fig.14の13は口径23.9cm、焼成良好で暗褐色を呈する。口縁部は水平に近く外反し、口縁端部の下側がやや肥厚する。胴部の張りはごく少ない。Fig.14の14は口径24.7cm、胎土に石英の砂粒を含有し、焼成は良く灰褐色を呈する。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端は小さく肥厚する。外面に刷毛目が残っている。Fig.15の1は口径33.4cm、焼成は良く黄褐色を呈する。Fig.15の2は丸底に台を付けた特異なものである。胎土に石英砂粒を含み、焼成は良く、黄褐色を呈する。内・外面ともに刷毛目を残している。Fig.15の3は平底に台をつけたものである。胎土には石英砂粒を含み、焼成は良く赤褐色を呈する。

#### 高杯形土器(Fig.15-4～8)

高杯形土器の、Fig.15の6・7はB溝出土で、他はA溝出土のものである。

Fig.15の5は脚の下部が復原できなかったが、口径28cm、器高25cm前後の大型のものである。脚部は鉢状を呈し、口縁部は大きく外反する。杯部と脚部は接合して形づくられている。焼成

は良く、黄褐色で胎土には石英砂粒を含んでいる。器面の内外両面に刷毛目を残している。Fig.15の6・7は同一個体であると考えられる。口径26cm、高さ21cm前後の比較的大型のものである。杯部は皿状を呈し、口縁部は外反し、水平に開いている。脚部の裾は面取りされている。焼成は良く、黄褐色である。杯部の内外両面と脚部の外側には丹が塗られていた痕跡がある。Fig.15の4は皿状の杯部をもち、脚部はFig.15の5に比べて経長い。杯部の上部と脚の裾部が復原できなかったため、口径、器高ともに不明である。焼成は良く灰褐色を呈し、胎土に石英砂粒を含む。Fig.15の8は脚部の高さ10cm前後の小型のものである。焼成は良く、暗褐色で、胎土に石英砂粒を含む。口径、器高は不明。

#### 器台形土器(Fig.16-5~13)

Fig.16の6・13はB溝出土、他はすべてA溝出土である。大小各種あって、器形はバラエティーに富んでいる。Fig.16の5は、器高17.8cm、上端部径13.5cm、下端部径13.2cmの大型のものである。上部下部とも同様の開き具合で、上部はゆるやかに外反している。暗赤褐色を呈し、胎土に石英砂粒を含む。Fig.16の6は器高13.3cm、上端部径8cm、下端部径12cmである。焼成は良く、灰褐色で胎土中に石英砂粒を含む。Fig.16の7は器高11.2cm、上端部径8.5cm、下端部径10.8cmである。焼成は良く、黄褐色を呈する。Fig.16の8は器高11.8cm、上端部径10cm、下端部径11cmである。焼成は良く灰褐色で胎土に石英砂粒を含む。上部はくびれ部から急に外反し、その内面はやや黒味をおびている。Fig.16の9は、器高10.9cm、上端部径7.5cm、下端部径9.8cmである。焼成は良く赤褐色で、胎土に石英砂粒を含む。上部はくびれ部から直線的に開き、内面はやや黒味をおびている。Fig.16の10は器高10cm、上端部径7.8cm、下端部径は10.3cmである。焼成良好で赤褐色を呈し、胎土に石英砂粒を含む。器肉は厚く、小型のものである。Fig.16の11は器高10cm、上端部径6.5cm、下端部径10cmである。焼成は良く、内面は赤褐色、外側は黄灰褐色である。上部はくびれ部からほぼ直線的にやや外反し、上端部近くで内湾する。Fig.16の12は器高10.3cm、上端部径5cm、下端部径10cmである。焼成は良く、灰褐色で、胎土に石英砂粒を含む。内外両面とも刷毛目が残っている。器肉は下端部から上端部に向かって次第に厚くなり、上端部ではやや外傾する平坦面を作っている。平坦面は黒色を呈している。Fig.16の13は器高10.5cm、上端部径7cm、下端部径9.5cmである。焼成は良く黄褐色ないしあ褐色を呈し、胎土に石英砂粒を含む。器肉は下端部から上端部に向かって次第に厚くなり、上端部では、やや内傾する平坦面を作っており、平坦面は黒色を呈している。

#### 鉢形土器(Fig.16-1~4、Fig.17-1~5)

鉢形土器のFig.16の3、Fig.17の5はB溝出土で、他はA溝出土である。大小各種あり器高4.3cm~13.3cmである。いずれも焼成は良く赤褐色ないし黄褐色で石英砂粒を含む。全般に内外両面とも剥離がひどく、調査は不明である。すべて平底で、胴部から口縁部にかけて単調に聞くものが多いがFig.17の1のように口縁部が急に大きく「く」の字状に聞くものもある。



Fig.11 遺物出土状況（上—B溝、下—A溝）

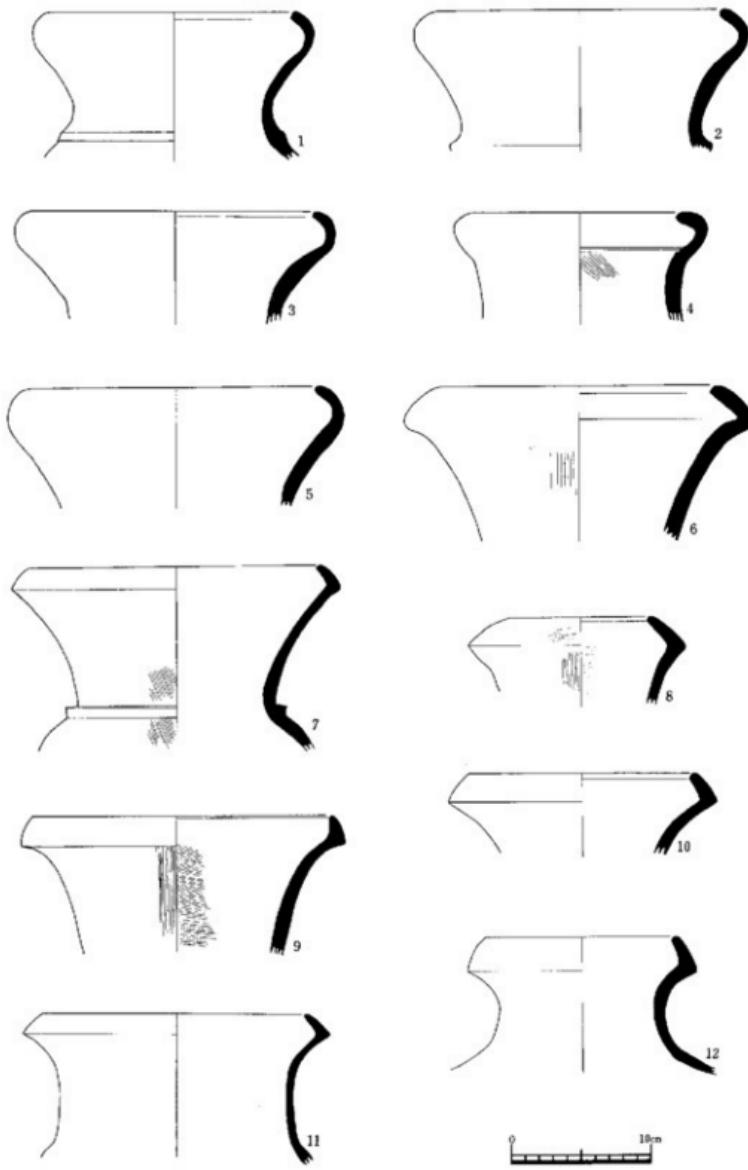


Fig. 12 1: 测定実測圖(I) (縮尺1)

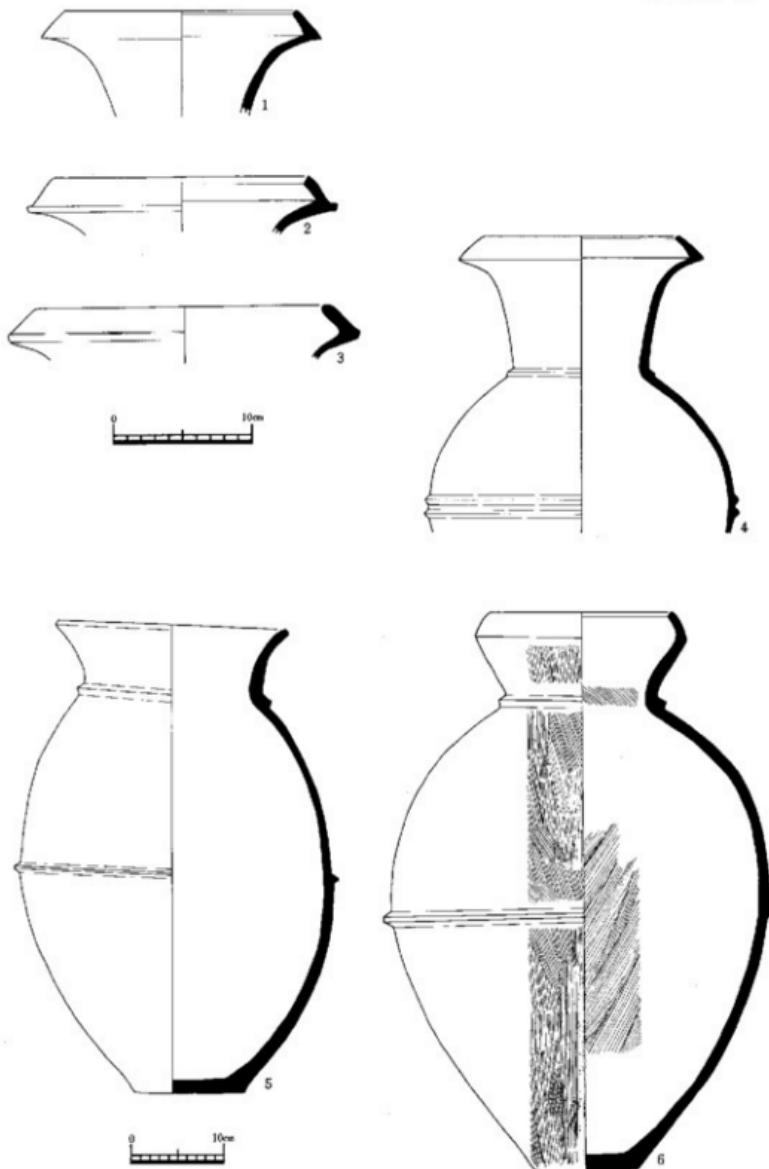


Fig. 13 土器実測図(II) (縮尺1/2)

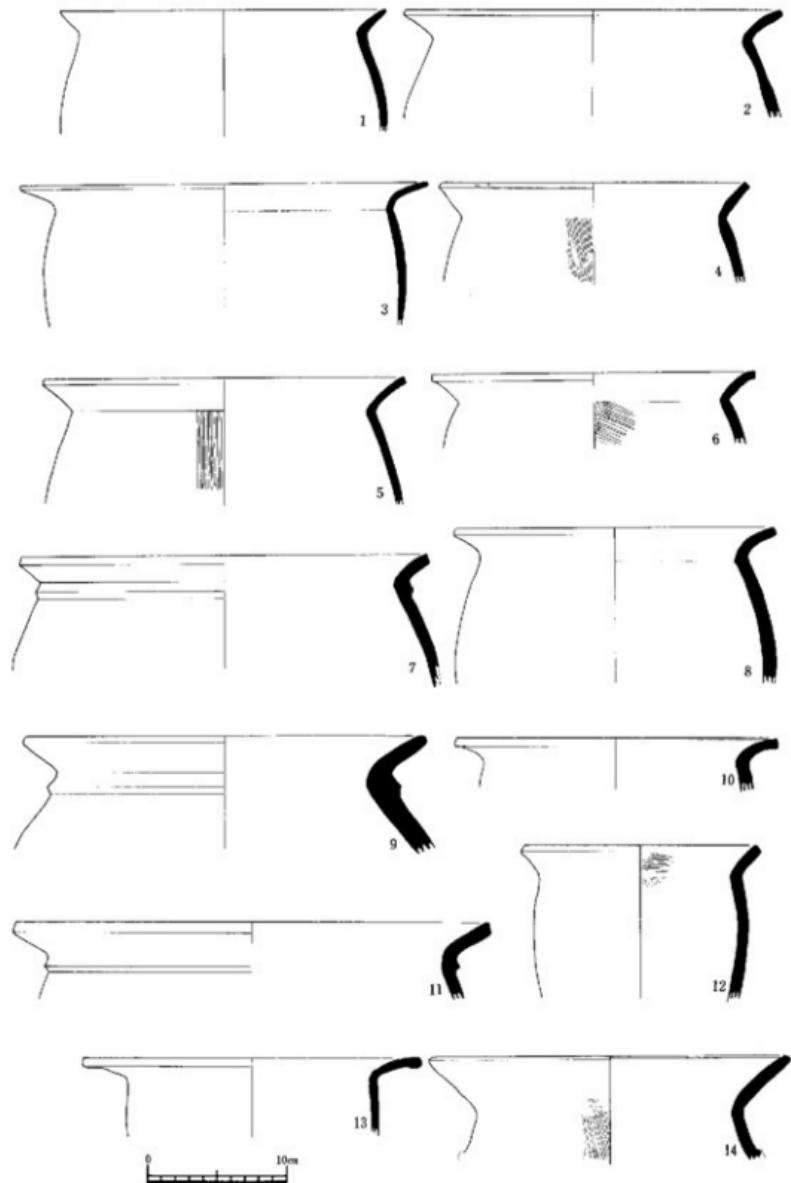


Fig. 14 土器実測図(III) (縮尺1)

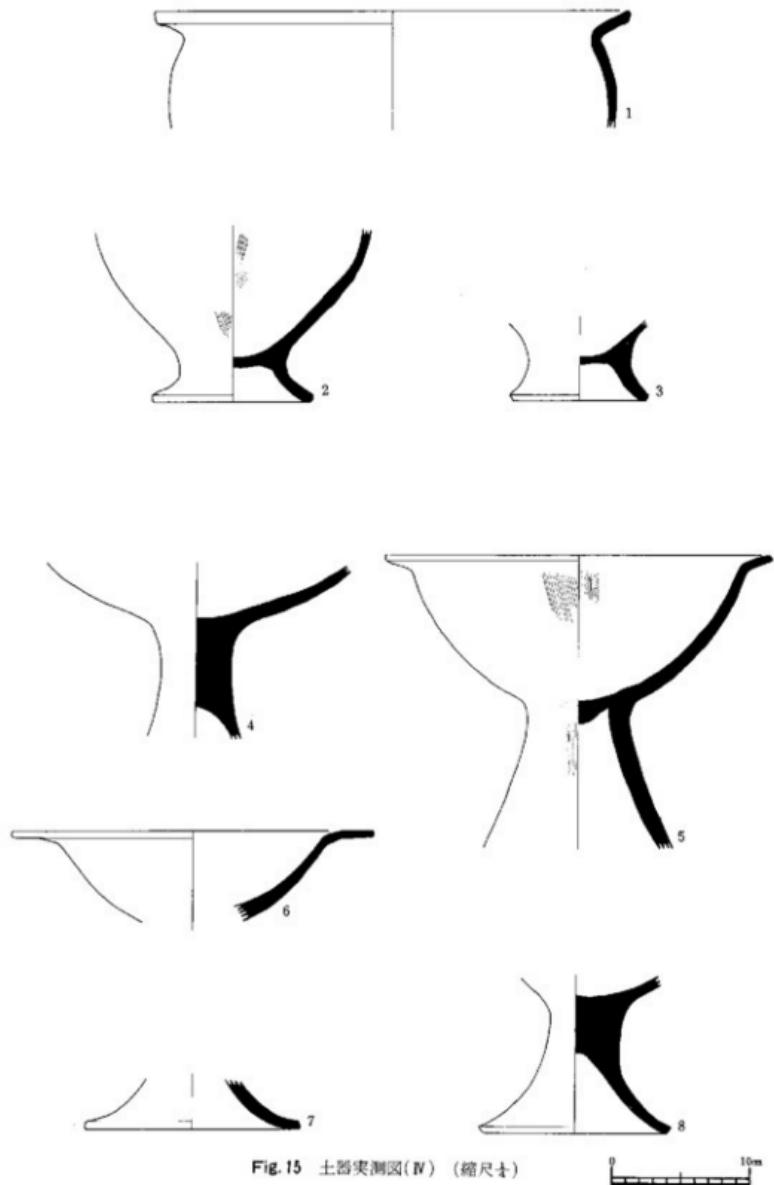


Fig. 15 土器実測図(IV) (縮尺±)

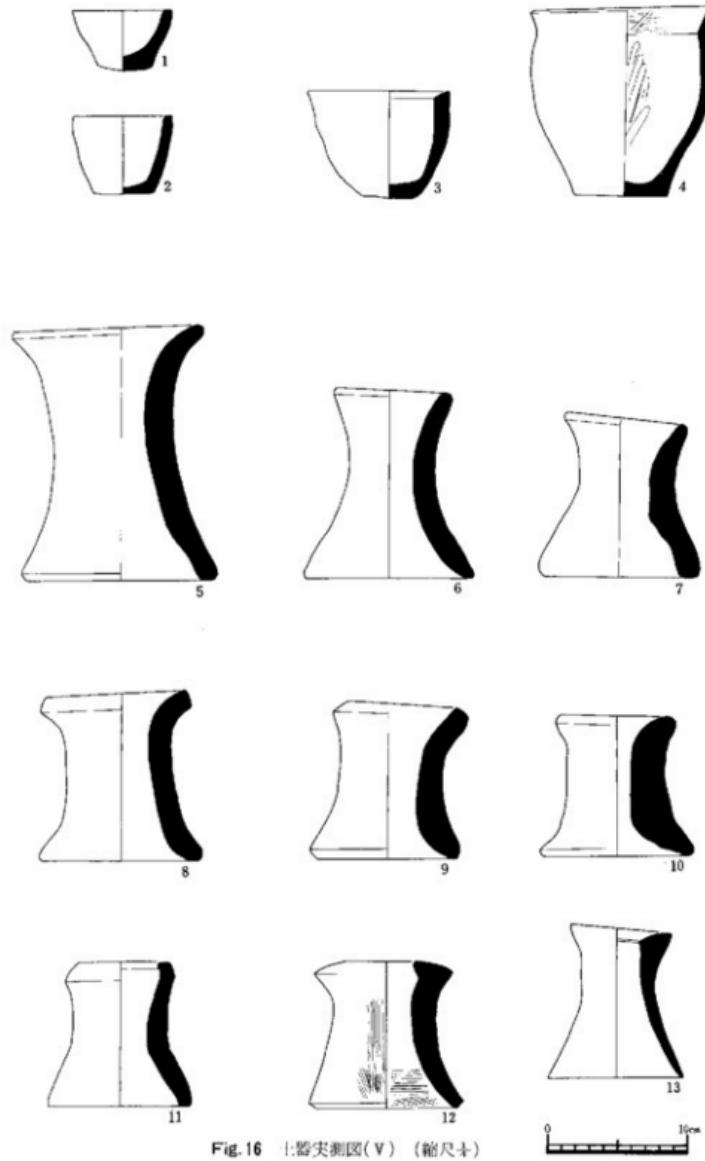


Fig. 16 1. 器実測図(Ⅳ) (縮尺1)

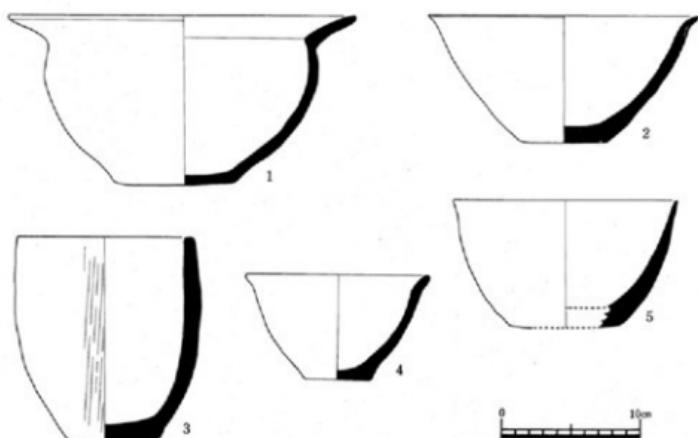


Fig. 17 土器実測図(VI) (縮尺±)

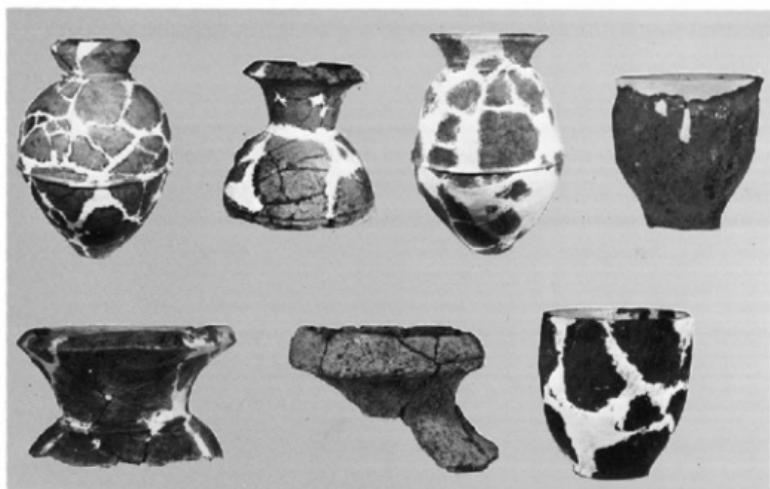


Fig. 18 土器(I)

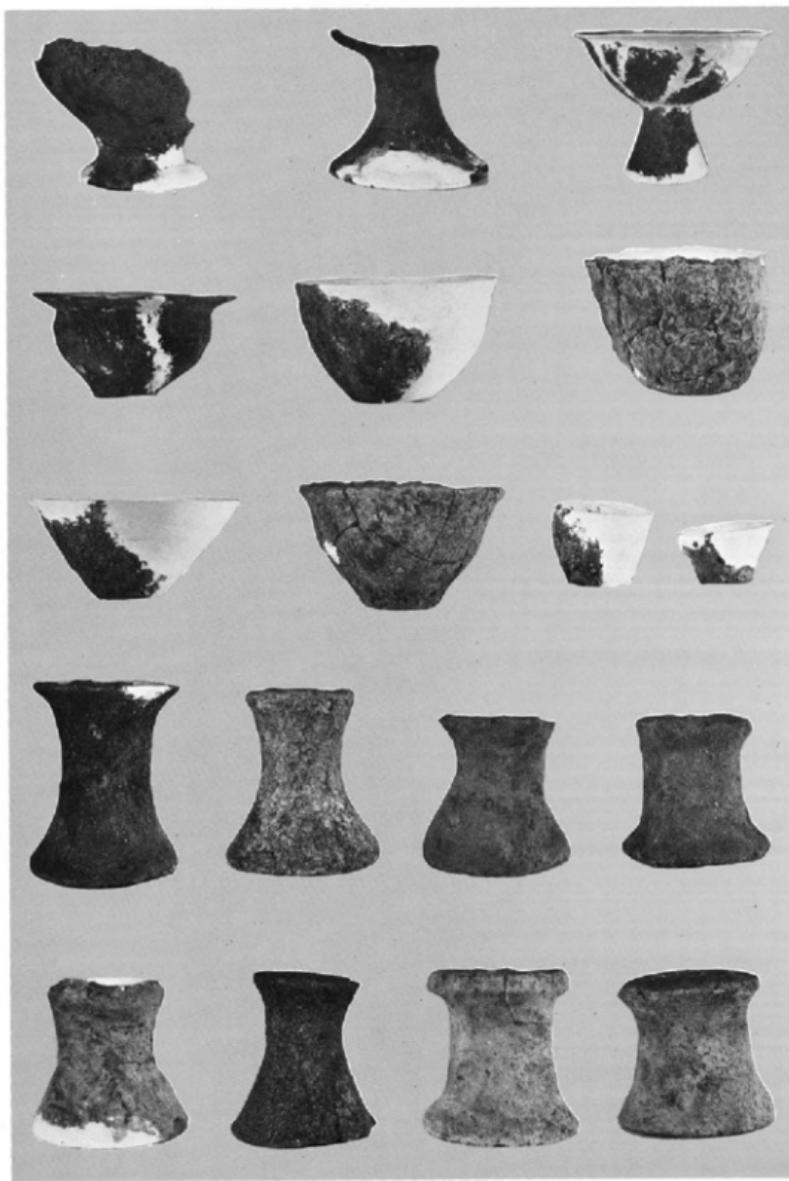


Fig. 19 土器(II)

## (2) 石器・鉄器・玉類

石器(Fig.20-1~4、Fig.22-8~11)、鉄器(Fig.20-7)、玉類(Fig.20-5~6)

1の残存部形態から考えると杏葉形の形態に類似するが、穿孔未完成の形跡があるため、杏葉形の形態を持つか、有孔の舟底形刃部外彫形に属するのか断言できない。背の部分の段を持つ形態から杏葉形の形態に類似すると考えておきたい。また自然面の部分を残すことから、研磨は完全ではない。花崗岩を石材とし、長さ7.4cm、身幅4.2cm、厚さ0.7cmで、断面形態は、くさび形を呈する。2の形態は舟底形刃部外彫形を示す。身幅が狭く、厚みのある有孔石泡丁である。刃部の先端部は、破損しているため明らかではないが、多分ゆるやかなカーブを持って背の部分と接するものと思われる。穿孔は、右からの孔が大きく、わずかであるが中心よりも深いえぐりがある。断面形態は、くさび形を示し、研磨は、全面にある。残存部は、長さ17.3cm、身幅3cm、厚さ6.5cmである。石材粘板岩。3の形態は、背の部分と先端部が急激なカーブを持って接する舟底形刃部外彫形である。穿孔部から破損しているが、穿孔は、右から集中的に行なわれた形跡がある。研磨は、全面に施行され、断面形態は、くさび形を示す。花崗岩を石材とし、長さ5.3cm、身幅3.2cm、厚さ6.5cm。4は、十字形の溝を持つ有孔の石鍤である。研磨は、完全に施行されており、断面形態は、上下に凹をもつ梢円形を示す。石材は、粘板岩で長さ5.5cm、幅1.2cm、厚さ0.8cmの長梢円形の石鍤である。

5・6は、ガラス小玉である。5は直径0.5cm、長さ0.3cm、孔径0.15cmの水色の色彩を持つ。6は、直径0.5cm、長さ0.2cm、孔径0.15cmで、紫紺の色彩を持つ。

7は、残存部の長さ7cm、身幅1.2cm、背幅0.3cmで鋸の付着が著しいが、刀子の一部。

8は花崗岩製の凹石である。この石製品は、肉面に凹部がある。表面のくぼみは浅く、裏面が深い形態を持つ。くぼみの周辺部は、自然面ではなく敲打によるものと考えられる。表面のくぼみの部分より裏面のくぼみが深いことは、むしろ裏面の使用度が多かったことを物語っている。長さ14.5cm、幅11.9cm、厚さ5cm。

9は粘板岩製の四辺形の形態を持つ両面砥石である。両面の中間部に自然面的な面が残っている。使用時の状態は、仕上げの工程時に使用されたと考えられる。長さ8.6cm、幅9.6cm、厚さ5.6cm。10は粘板岩製の砥石である。9と同様に仕上げに使用されたことを推定させるキメの細かい砥石である。ただ周辺部の剥離面は、砥石製作時の剥離と思われる。長さ12cm、幅9.6cm、厚さ5.6cm。

11は、花崗岩製の片面全体に剥離を行なっているScraper的要素の強い石器であるが、他の石器の未製品の可能性もある。片面は、自然面で刃部となる部分のみに剥離がみられる。この石器を現時点でとらえるならば、片面加工の片刃刃部石器となる。長さ7cm、幅7.5cm、厚さ1.5cm。

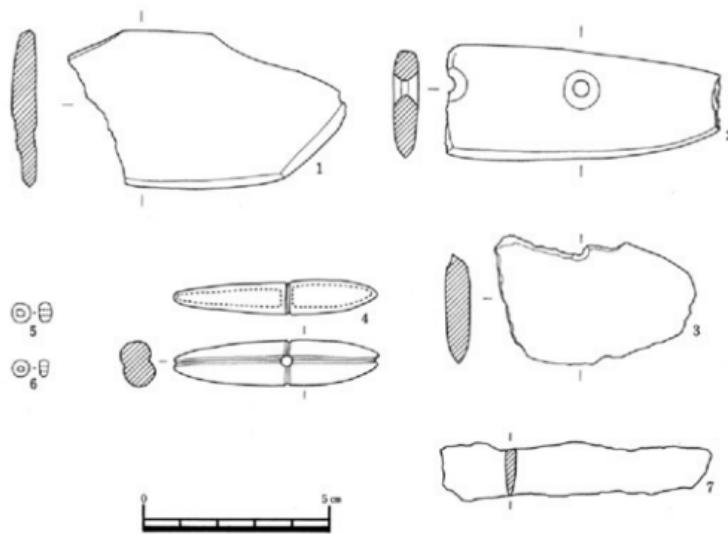


Fig. 20 石器・鉄器・玉類実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

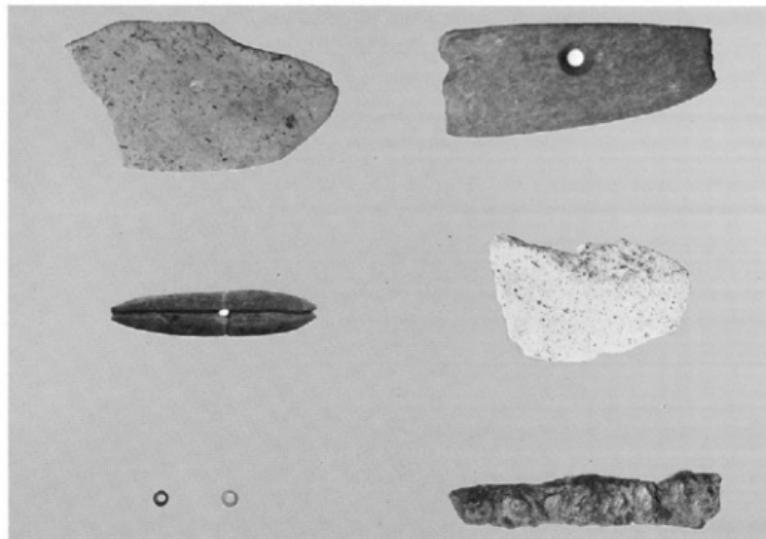


Fig. 21 石器・鉄器・玉類

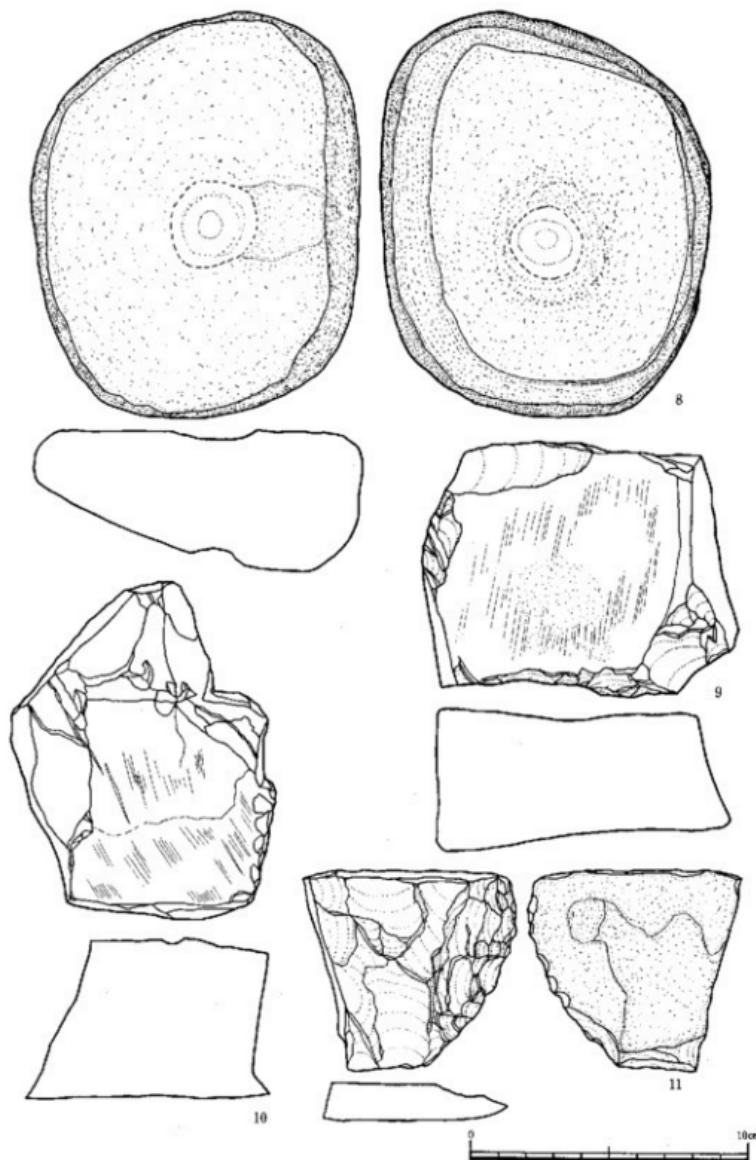


Fig. 22 石器・石製品実測図(縮尺1/2)

## IV おわりに

小窓遺跡C区3-c地点の発掘調査において、2つの溝状の遺構と多量の土器その他の遺物を検出したことは、今まで述べてきたとおりである。また、発掘調査にいたる経過、あるいは発掘調査の経過の項において述べたように、遺構の大部分はすでに圃地造成工事に関連して、破壊されており、非常に残念なことであった。

今回の発掘調査で明らかになったことをまとめると、以下のようになる。

- 1 遺構は、標高25m前後の南面する丘陵中腹に位置している。
- 2 当遺構の北々東約30m、標高35m前後の位置に、弥生時代後期前半の祭祀遺構とともに石蓋土塙墓群がある。（第1次発掘調査のC区3-b地点）
- 3 遺構には、L字形で、丘陵の下方に向かって開口するA溝と、斜面に直角に走るB溝とがある。
- 4 A溝は、赤褐色の地山を深さ約1mほど掘り込んで作られた、幅1.5m~2mの溝状の遺構で、その内部からは、土器・石器・鉄器・ガラス製品などが出土した。
- 5 A溝の土器は、弥生式の壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高杯形土器・器台形土器など各種におよび、深さ1mほどの溝をうめつくすように、多量に集積されていた。特に、壺形土器・甕形土器には大型のものが多く、保存状態がわるくて復原できたものは少なかった。
- 6 A溝からは土器以外に、石臼丁・石錐・砥石・凹石などの石器、鉄器（刀子）などの生活に密着した道具類が出土した。その他には、ガラス小玉が出土した。
- 7 B溝は、A溝に隣接する幅1mの、斜面に直角に走る溝の一部である。
- 8 B溝の土器は、弥生式の壺形土器・鉢形土器・高杯形土器・器台形土器で、甕形土器はなかった。特に高杯形土器は、内・外両面とも丹が塗られていた。

これらのことから、A溝とB溝とは、性格を異にするものではないかと考える。A溝の開口部は、谷の先端部に向かっており、すなわち谷からの風が吹き上げる位置にあり、しかも溝底は平坦でなく丘陵上方に向かってゆるやかに上昇している。さらにL字形の溝のコーナーには特に焼土と灰が集中していたことなどから、墓地に付随する祭祀遺構という考えのかなに、祭祀遺構に関連する土器貯蔵庫、あるいは土器の窯または窯に付随する施設を考えることも可能であると思われる。B溝は、溝の状態や出土遺物からみて、墓地に付隨する溝状遺構であると思われる。いざれにしても、A溝、B溝とも破壊をまぬがれたごく小面積内で確認した遺構だけに、充分な性格づけを行なうことは困難である。またC区3-b地点の石蓋土塙墓との直接の関係を知ることはできなかったが、時期的にはほとんど同一で、弥生時代後期前半に比定される。

福岡市 小笪遺跡  
第2次発掘調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第34集

1975年(昭和50年)3月31日

発行 福岡市教育委員会  
印刷 チューニング